

漢法苞徳塾資料	No. 079
区分	医古文・資料
タイトル	潔古・註：『薬註難経』より
著者	八木素萌
作成日	1997.04.19

完全に亡失したと思われていた「張元素」（著名な金元四家の一人・潔古老人）の『薬註難経』が「中国中医研究院図書館」に所蔵されていたことが最近になって分かった。それを「オリエント出版」が影印し、判読可能な所は写植文字で補足して『難経稀書集成』の中に入れて出版した。原本では「七十四難」の注文の途中から「八十一難」までが欠けていた由である。

その「潔古」の注釈の内「四難」の中の脈の陰陽を論じている部分の注解は、私が初めて接した解釈内容で、非常に参考になると思った。この部分を先ず紹介したい。

「所謂一陰一陽者謂脈来沈滑也・腎脈也・其時寒其性堅・腎名與病十一月十二月之氣也・左」

「一陰二陽者為脈来沈滑而長也。肝脈也・其時風其性動・正月二月之氣也・左関」

「一陰三陽者為脈来浮滑而長・時一沈也。心脈也・其時熱其性軟・三月四月之氣也・左寸」

「所言一陽一陰者・謂脈来浮而濇也。三焦脈也・其時暑其性柔・五月六月之氣也・右尺」

「一陽二陰者・謂脈来長而沈濇也。脾脈也・其時湿其性緩・七月八月之氣也・右関」

「一陽三陰者・謂脈来沈濇而短時一浮也。肺脈也・其時燥其性斂・九月十月之氣也・右寸」

「四難」の前段に「…浮而散大者心也・浮而短濇者肺也・腎肝俱沈・何以別之・然・牢而長者肝也・按之濡・拳指来実者腎也。脾者中州・故其脈在中…」と『難経』が記述していて、続いて脈状における陽状の脈と陰状の脈を記述した後に、陽状の脈と陰状の脈が混合して現われる脈について記述している為か、他の注解者には「潔古」のような解釈を論じたのを目にしていない。

「各以其經所在名病逆順也」と言う『難経』の記述をどのように解釈するのが正しいのか？と言う問題と極めて密接に関わっている部分であるだけに、潔古のこの解釈は非常に興味深いものがある。

「各以其經所在名病逆順也」の部分は、前段の記述との関連では、唐突な記述とも言えるので、『十六難』の記述とも緊密な関係があると感じるのである。「何經の病的反応であるのか？」と言うことか、或は又、「常」のものかどうかを考察せよとの要求か？